

新京都市商業振興ビジョン（仮称）策定委員会 第1回都心部部会

日 時：平成15年8月18日（月）午後7時～9時8分

場 所：ひと・まち交流館京都 3階第4・第5会議室

1 開会

事務局（西川） 定刻になりましたので、新京都市商業振興ビジョン（仮称）策定委員会第1回都心部部会を開催いたします。私は、この策定委員会の事務局を務めさせていただいております商業振興課長の西川でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

開会に際しまして、本来でしたら島田産業観光局長が一言ご挨拶申しあげるべきところではございますが、あいにく公務出張中のため、都心部部会委員としても参画させていただき産業観光局商工部長の山添洋司から、一言ご挨拶を申し述べさせていただきます。

山添産業観光局商工部長 ただいま紹介にありました、産業観光局商工部長の山添でございます。皆様方には大変お忙しい中、また、夜間という会議にしては異例の時間帯ではございますが、できるだけたくさんの皆様の委員にご出席いただきたいということで調整させていただきました経過ではございますが、ご出席をいただきまして誠にありがとうございます。

今、西川課長の方から申し上げましたように、産業観光局長の島田が公用で出張しております、欠席させていただいております。いずれ、2回目以降の部会で、思うところと言う場面があるかと思えます。私が代わりに一言ごあいさつをさせていただきます。

皆様には平素から大変お世話になりましてありがとうございます。後ほど、今回のビジョンを策定いたします経過につきまして、西川課長の方から説明させていただきます。本市では、平成10年度に京都市商業振興ビジョンというものを作っております。そのビジョンの中では、いわゆる競争社会ということを前提といたしまして、その中で商業振興をどう進めていくか、商業振興ビジョンまたは小売商業振興ビジョンというものになっていたわけですが、いろんな現状の分析とそれから課題などを上げまして、具体的なアクションプランを掲げて、これまですべてのものについて着手をしまいいりましたところでございます。一方で、平成10年度以降、商業環境あるいはそれ以外のところも含めて、ずいぶん、状況も変わってきております。そういう中で、先ほど申し上げました競争社会を前提とする大前提の部分は何も変わらないわけですが、今日的な課題を整理いたしまして、今後の商業のあり方について具体的に検討して行こうということで、今回、商業振興ビジョンの策定委員会を設置させていただいております。今回はその中で親委員会の下に二つの部会を設けているわけですが、その一つが本日の都心部部会ということで、今回の商業振興ビジョン（仮称）を考える上で、都心部をどうしていくのか、どうさらに発展させていくのか、課題はなんなのかについてが大きな一つの柱であると私ども考えておりまして、今回部会を作らせてもらったところでございます。

前回のビジョンでは特にエリアの限定行つての議論をするようなことは致しませんでしたが、今回については、都心部という地域を抜き出してその部分について特に議論を深めようという考えでございます。

ご存知の通り、四条河原町の周辺では、商店街、商業者の皆様、あるいはその他のいろんな運動を行っておられる住民の皆様とのパートナーシップによりまして、たとえば

100円循環バスあるいはまちなかを歩く日とかいろいろな取組が行われております。いわゆる商業関係でいろいろなものが影響するわけですが、そういう、いろいろな取組の流れがある中で、そういうことも踏まえた議論ができればいいのではないかと考えております。

また、都心部といいますとどこがエリアかということがあろうかと思いますが、基本的には四条河原町を中心とする、繁華街というエリアということで、考える問題についてエリアが伸びたり縮んだりすることがあろうかと思いますが、あらかじめ特にエリアを限定して、議論を始めるといことは今のところ考えておりませんので、よろしく申し上げます。皆様の議論の中でそういうことがあれば、また、考えていきたいと思っております。

そう、回数が開けるわけではございません。皆様方のこういう会合の場、あるいは、個々にお伺いをして御意見をお聞きする、いろいろな方法にて、できるかぎりたくさんの方の御意見を頂戴して、それが今回のビジョンに反映をできたら大変喜ばしいと思っておりますので、どうぞよろしくお願ひしたいと思っております。

事務局（西川） ありがとうございます。

（資料確認）

2 策定委員会都心部部会の設置・運営について

事務局（西川） それでは、まず都心部部会の設置及び運営についてご説明させていただきます。

この部会は先ほど部長も申しましたとおり、新京都市商業振興ビジョン（仮称）策定の一環として、都心繁華街の商業の視点からの活性化策を検討するために設置しようとするものであります。去る7月28日に第1回の新京都市商業振興ビジョン（仮称）策定委員会を開催し、委員の皆様と意見交換したところ、具体的な検討につきましては都心部繁華街の活性化を協議する都心部部会と、商業振興全般を議論するワーキング部会の二つの部会を設置して議論を進めるべきとのご意見をいただきました。その後、新京都市商業振興ビジョン（仮称）策定委員会の若林靖永委員長とも相談のうえ、都心部部会につきましては、本日お集まりの学識経験者の皆様、事業者の皆様、各分野で専門的な知識をおもちの皆様、そして2名の市民公募委員の皆様と行政の、合計14名で構成することになりました。

本部会委員への就任に関する委嘱状につきましては、あらかじめ皆様方の席上に置かせていただいておりますので、よろしくお願いいたします。なお、策定委員会委員と兼務されている委員の皆様におかれましては、改めて都心部部会委員としての委嘱は行わない旨ご了承いただきますようお願い申し上げます。

次に運営についてであります。京都市民の皆様が広く市政に興味をもち、参加していただきたいという観点から公開で開催したいと考えております。本日も30名の傍聴席を用意しております。またご発言内容等については、あらかじめ委員の皆様のご承諾を得たうえで摘録として公開する予定でございます。どうか、ご了承いただきますようお願いいたします。

3 委員紹介

事務局（西川） それでは、次に委員の皆様をお席の順に五十音順でご紹介させていただきます。寺町専門店会商店街振興組合理事長の石野猛様でございます。株式会社居戸代表取締役で、「京の三条まちづくり協議会事務局担当」の居戸節二様でございます。株式会社阪急百貨店四条河原町阪急店長の井戸博美様でございます。市民公募委員の大島祥子様でございます。財団法人京都市女性協会事業課課長補佐の奥村美保様でございます。市民公募委員の栗原大輔様でございます。河原町商店街振興組合理事長の齋田六二郎様でございます。京都大学大学院工学研究科助教授の中川大様でございます。龍谷大学経営学部教授の西口光博様でございます。河原町商店街振興組合理事の藤野祥一様でございます。京都三条ラジオカフェ放送局次長の松岡千鶴様でございます。今回の新京都市商業振興ビジョン（仮称）策定委員会委員長で、本部会の進行をお願いしております京都大学大学院経済学研究科教授の若林靖永様でございます。新風館館長の渡辺敏幸様でございます。最後に、京都市産業観光局商工部長の山添洋司でございます。以上が、委員の皆様のご紹介でございます。

次に、関係機関からお越しいただいている方々をご紹介いたします。今回のビジョン策定につきましては、中小企業庁の補助制度（中小商業活性化事業費補助）を活用させていただいていることから、本日は近畿経済産業局（産業振興部流通・サービス産業課商業係）の小谷係長様と清遠様にお越しいただいております。また日頃、私どもと一緒に市内の商店街等の振興を進めていただいている京都府から、商工部観光・商業課の久光企画主任様にご出席していただいております。どうかよろしく願いいたします。

以降のこの部会の議事進行につきましては、新京都市商業振興ビジョン（仮称）策定委員会委員長の若林委員長をお願いしたいと考えております。若林委員長、よろしくお願いいたします。

若林委員長 それではこれからは私の進行で都心部部会を説明させていただきたいと思っております。いろいろ不慣れな点もあるかと思いますが、今回のビジョンをよりよいものにするために努力したいと思っておりますのでどうかよろしく願いいたします。

この商業振興ビジョン（仮称）策定委員会、そして都心部部会を始めるにあたって少しだけお話をしようと思っております。私自身の考え方をご紹介したいと思っております。前回平成10年度に商業振興ビジョンをつくりました。ちょうど商業振興のあり方を大きく見直す時期に当たっており、いろいろな議論をして方向性を出すという意味では非常に画期的な内容をもった商業振興ビジョンだったのだらうと思っております。一方で、具体的な各地域にふさわしい商業振興をつくっていくということではいろいろな課題を残しましたし、そのことをはっきりさせたのがその後の、後ほど説明があると思っておりますけれども京都市商業集積ガイドプランということで、各地域、エリアごとにふさわしい商業のあり方を考えていこうという方向性についての取組が始められたとってよろしからうと思っております。

そして今回、京都市商業振興ビジョン、まだ「仮称」とついていますけれども、最終的にまとめたものをどういう名称にするのかも実は宿題になっております。それは二つの性格をもっているのだらうと思っております。

一つはやはり京都のまちにふさわしい商業を育てていくということで、消費者、事業者、そして広く市民の手によって育てていく京都の商業。華やか京の商業、京の商いというのが前回の商業振興ビジョンの一つのキャッチフレーズでした。その中身、フレーズは引き

続き大事にしたいテーマだと思っております。これは消費者，商業者，市民の手によるものであって，行政が一人頑張っただけということではないはずなのです。そういった商業の方向性なり課題なりを示していくというのが第一の役割だろうと思っております。

したがってこの都心部部会に関しても四条河原町を中心とした、「中心とした」というのはどこからどこまでなのかも含めて，周辺といっても地域で各エリアなりの特徴，個性をお持ちですからそういったことも踏まえられた議論が必要だと思います。この四条河原町を中心とした都心繁華街の未来像のようなものも，きちんと考えようということが一つの大きなテーマだと思っております。

もう一つの大きなテーマはこうした商業振興ビジョン，消費者，商業者，市民の手によって育てていこうという商業の方向性を促進するために行政は何をすべきか。行政の施策，行政の事業としてどういうものが求められるのか。そのアクションプランについて，従来型の商業振興施策は正直に申しましていろいろな意味で行き詰まりを見せているといっても過言ではございませんので，ぜひこのあたりでも知恵を絞って未来を共に展望できるアクションプランをつくるという議論にできたらいいなという，これが第二のテーマだと思っております。都心部部会におきまして行政としてこういうことはできないだろうか，行政としてこれが邪魔になっているのだということ，大きな四条河原町を中心とした都心繁華街の未来像を実現するために，行政として調整すべき方向，事業として展開すべき課題等について，ぜひアイデアを出していただきたい。これが二つ目の中身だと思っております。

運営そのものは皆さんから出されたご意見を一つひとつ大事にしながら，それを私も含めて事務局と，あとは学識の先生方のお力も借りて交通整理をしながら，一人ひとりのご意見を基にたたき台をつくり，またそのたたき台を基に皆さんのご意見をうかがうという形で，リードするのは私をはじめ委員長及び事務局の仕事だと思っておりますけれども，つくっていくという意味では共にここでの議論を通じてつくっていく。そういうことで都心部部会の出す方向性，つまり四条河原町を中心とした繁華街の未来像というテーマと，そのために行政はどうすべきかについて，活発なご意見をうかがって進めていただければと思っております。

もう一つだけ，そうは言いましてもおそらく注意を喚起しておいたほうがいいだろうということは，商業振興ビジョンの策定そのものは来年 3 月を締切りとして，かなりの突貫工事といってもいいのですけれども，急ピッチに議論を進める予定にしております。都心部部会としてはかなり具体的なエリアの具体的な課題になりますので，この 3 月までに何でもかんでも全部結論を出そうではないかということではぎくしゃくしてしまうだろうと思っております。したがって今回は商業振興ビジョンのなかの 1 部会ということで進めさせていただいて，一定の方向性なり課題なりを皆さんで大いに意見交換をしていただいで洗い出すことができたらと思っております。またその後の進め方については，都心部は都心部なりの進め方があるのだらうと思っておりますので，そのあたりも皆さんのご意見をうかがいながら，事務局とも相談して方向性を出せたらいいのではないかと思います。

その意味では 1 部会ではありますが，かなり独立性の高い部会だと私自身は理解しております。そのようなおつもりでご自由に，活発にご意見を述べていただけるとありがたいと思っております。そういう考え方をもっているということをご紹介いたしました。

4 報告

- ・新京都市商業振興ビジョン（仮称）の策定について
- ・京都市の商業について

若林委員長 それでは本題に入っていきたいと思います。本日の本題は、一つはまずレクチャーを受けるということで、この京都市商業振興ビジョン（仮称）の策定及び京都市商業の現状の二点について事務局からご説明いただき、その後、皆さんから自己紹介を兼ねてこの都心部部会に対する最初のご意見を出していただきたいと思います。時間は 9 時までですのであまりごさいませんけれども進めていきたいと思います。それでは事務局からよろしく願いいたします。

（事務局より資料説明）

5 意見交換

若林委員長 今の説明を聞かれてご質問等いろいろあると思いますが、それはこれからのご意見のなかで必要であれば出していただいても結構ですし、本日の都心部部会そのものは都心部のあり方をめぐって最初の頭出しということで、皆さんの問題意識、ご関心のあるテーマを出していただくというところに集中して進めていきたいと思います。また何かありましたら、事務局に個別にご質問していただくということでお願いしたいと思います。

では早速、お一人ずつご意見をうかがっていききたいと思います。9 時を目安に終わるということですから、できましたらお一人 3~4 分で進めていただいて、最後に 10 分間ほどまとめの時間を取っておきたいので、あと 1 時間ほどかけてお一人ずつご意見をうかがっていききたいと思います。最初に元京都市産業観光局長で京都の商業をはじめとする産業振興に長年にわたって携わってこられ、現在龍谷大学経営学部教授の西口委員からお願いしたいと思います。よろしく願いします。

西口委員 事務局から説明がありましたので、ここにおられる方々の考え方にそれほど大きな差異はないと思いますけれども、やはり都心部というのは京都の顔でもありますし、単なる「周辺商店街」対「中心街」という関係ではなく、広く京都市は 4,000 万人を超える観光客がみえるわけです。ヒンターランドからいうと 1 億何千万人と思っていいぐらいの場所ではないかと思っております。それに新たにできたまちではなく歴史や過去からの連続性も非常にありますし、そういうことも踏まえて中心部の都心については考えていく必要があるのではないかと思います。

それからご説明ではかなり物販に偏った説明がされているわけですが、やはり都心部は物販のみならず、統計的な言葉からいえばサービス業というジャンルが入ってくると思います。本来買い物自身にはお客様サイドの、今回のビジョンのなかでも消費者の視点というのが入っていますが、ものを買うという行動は、ものを得たという満足感以上に選択のプロセスやその空間で時間を過ごすという楽しみがあるわけです。そういう心理的満足感も都心部にはかなり求められるのではないかという気がしております。そのためには説明のあった以前の商業施設ガイドプラン、市内一律の一定のルールではなく、より広域的な競争に勝つための役割を都心部に担っていただくということです。したがってここ

にかなり実際に商売をされている方がたくさんおられますので、その方々の日々の頑張り、営業活動等のご意見も十分お聞きしてまとめていく必要があると思っております。

若林委員長 ものを買うということだけでしたら日常の買い物は一つの大きな店で、総合スーパーとかそういう買い方もあると思いますけれども、一つの都心部全体のエリアがもつ意味ということですよと買い物をする、ぐるっと回る楽しさ、そういう一つの楽しい町並になることが都心部独自のテーマだというご指摘だったと思います。

では次に都心部のもう一つの大きなテーマになると思うのですが、交通問題を中心とする都市計画全般についてご研究をされておられる京都大学大学院工学研究科助教授の中川委員にお願いしたいと思っております。

中川委員 私のほうからコメントを述べさせていただきます。私はこの委員をお引受けするためには二つの条件があると事務局のほうに申しあげました。

その一つは、まず最高水準のものを目指すものであるということです。最高水準というのは世界最高水準のもの、誰もやったことのないもの、非常に困難なことをやり遂げることですが、やはりこの京都はそういうことを目指さなければいけないはずであると思うのです。数日前の新聞に大きく、「国家戦略としての京都の再生」ということが出ておりました。そのなかにあった文言のなかでも、例えば北京や長安、ローマ、フィレンツェ、サンクトペテルブルグ、パリといった都市と比べて京都は勝るとも劣らない都市であると明言されていて、これは誰もがそれを認めるものであると思います。その意味では都市全体がそういうステータスをもたなければいけないわけで、そのなかにおいて都心部というのは、中心としてそれだけのものをつくっていかなければいけないはずだと思うのです。そういうものを目指すのでなければ引き受けないと申しあげました。

残念ながら今日の資料を見た限りでは、最高水準のものを目指そうという気合がまったく見られないのではないかと。明らかに約束違反だと思います。並んでいることがあまりにも平凡すぎて、こういうものはどこでも書けると言わざるを得ないのではないかと思います。

例えば最高水準のものを目指すということは、ただ言葉だけでいうのではなく、いろいろな分析の仕方やアプローチの仕方があるわけです。京都には京都にしかないものがいくつもあります。例えば創業何百年というお店がいくつあるというのは日本の他の都市を圧倒しています。あるいは京都ブランドといわれるものにはこういうものがあって、それは世界においてこういう地位を占めているとか、そういうデータは集めようと思ったら集められるはずですよ。そういうものが土台にあって議論しなければいけないはずなんです。これにはそういう気合がまったく感じられないということ。

第二点目は、これはビジョンをつくるということですが、ビジョンというのはもともと実行しなければまったく意味がないわけです。実行につながるものをつくるならお手伝いしようとして申しあげたわけです。それはこれからのことなのですが、今日見せていただいた資料で見ると、前回の商業振興ビジョンがどこまで実行されたかに対する検証がはなはだ不十分です。本当にビジョンとしてあがってきたもののうちのどれだけのことが達成されてきたのかが、例えば資料6の6ページですが、何年度に補助事業をしたかが書いてありますけれども補助事業をするのが目的ではなかったはずですよ。補助事業

をしたことによってどういう結果が生まれたのか。そのために補助事業をしているわけですから、補助事業をしたことが結果ではないわけです。

にぎわい創出事業というものがあるなら、本当ににぎわいが創出されたかが検証されてこそ多くのビジョンが達成されたかが検証されるはずです。そういう意味でも私が2番目に申しあげた、本当に実現する気があるものをつくるという点でも今日出してもらった資料でははなはだ心配です。これからぜひともそういう方向でデータを集めて、合意形成に向けての説得力を高めるといふものをぜひともしていただきたいと思います。

若林委員長 今のご指摘は都心部部会だけではなく、商業振興ビジョン作成全般にいわれていることだと思います。そちらのほうにもきちんと持ち帰って議論をしたいと思います。とくに創業何年とか京都ブランドということで、京都の商業は他の商業と同じように数がこうなっている、売上のシェアがこうなっているという切り口だけではない形で、京都の商業の見にくさというものを分析のテーマにして評価すべきだということは大事な指摘ではないかと思います。これは都心部にとくに大きく関わるテーマだと思いますので大事にしていきたいと思います。

それではどんどんいきたいと思います。次に商店街の関係者からも委員として出席していただいておりますので、順番にご意見をうかがっていきたいと思います。まず寺町通の御池通から三条通の間の商店街にあります寺町専門店会商店街振興組合理事長の石野委員、お願いしたいと思います。

石野委員 今の都心部の状況を見ても交通アクセスは地獄にあると思います。そして百貨店という大きな店舗もあるわけです。それから大きなお店もありますし、いろいろな店があるわけです。そうしたなかで今われわれのお客様の中心層を見ると、以前出された統計のなかでは、だいたい各商店街とも20~30%は京都以外のお客さんが多いという結果が出ています。そしてそのなかで中京というところでありながら、中京以外の区域から来る人が60%を占めているのです。中京のなかで中京の品物を買う人が20%しかないという統計が出ています。そのように地域密着型ではなく、大きな都心型の商店街になっているということです。

そのように多くの人たちが地方からお見えになっているにもかかわらず、はたしてそういう人たちが本当に安心してゆっくり歩けるまちであろうか。ここをいちばん心配するわけです。現在はそういう人たちが安心して、本当にゆったりと歩けるまちではない。そのなかにはいろいろな要素がございます。例えば至るところに駐輪がされているという問題。あるいは各店舗におかれましてはみ出し商品が出ているという問題もあります。また治安の問題といいますと大きな都心の繁華街と歓楽街を抱えている地域ですから、今でも夜ごと暴走族が、あるいはギンギン族が走り回る。するとお客様の層から見れば百貨店などは年齢層の高い方もいらっしゃいますけれども、まちなかは若者が多く歩いている。すると肩が触れただけで文句をいわれる、目線が合っただけで文句をいわれる。そういう状態もあるだろうと思います。

そのなかでお客様たちが来られたときに本当にゆったりともものを見ながら歩くまちであろうかという、決してそうではないと思います。

そこにはいろいろな安全施策の問題もあるのですけれども、行政の批判をしてはいけな

いのかかもしれませんが、都市計画、まちづくりというなかでもっと最初に遠くを見てつくっておくべきではなかったのかと思います。例えば一つの例を挙げますと、京都市のビジョン、いろいろな報告書のなかには、今日の会議室もそうですが学校跡地も立派になっている。そういう施設については立派になったと。できたところはきれいになっていますけれども、繁華街の中心になっている立誠校の跡地はどうなのか。あそこにもっと手をかければ風俗営業は十分に探知できたらと思います。そして周辺の学校さえきれいにしておいたらそれでいいといいますか、そういうことさえしてこなかった。

御池のシンボルロードもそうです。あれも見かけだけの道路ではないか。今になって御池のシンボルロードをどうしようか、みんなが歩けるようにしよう、散歩できるようにしようということを言っていますけれども、それならそのときに自転車専用道路をつくっておかなかったのか。歩行者が安心して歩ける道をつくらうといいながら、今自転車が走り回っている。おそらく車より自転車の事故が起こるだろうと思います。そういうまちの安全ということについて行政の力が少し足らなかったのではないか。今後ともできることから行政、警察を含めて、まちの安全ということに対してもう少し支援があってもいいのではないかという気がしました。

若林委員長 全国的に見ても都心、繁華街の課題としてどんどん恐くなってきているということはたしかにおっしゃるとおりです。もちろん御池通の自転車もすごい勢いで飛ばしておりますし、木屋町通も金曜の夜などはいろいろな人が集まって大変です。

次に寺町から新町までのまちづくり組織で、近年新しい店舗の集積がとくに顕著な京の三条まちづくり協議会事務局の居戸委員にお願いしたいと思います。

居戸委員 今、石野委員がおっしゃいましたように三条通も道が狭いのです。これに交差している道がまた狭い。そういうなかでやはり交通問題は自転車もたしかに問題ですが、自転車は走り方に問題があるのです。それよりも駐車です。右側も左側も駐車だらけです。これをなんとか先に考えることがいいのではないかと思います。と申しますのも私どもも観光のお客様が多くて京都の方はなかなか買っておられないのです。商売をなさっているなかで、中京の地元のお客様が非常に少ないといわれましたけれども、私どもも京都のお客様が出てこられる割合と、地方のお客様、観光で来られるお客様でいうと観光のお客様がいちばん歩いておられるのです。やはり歩きにくい。

そういう面から言いまして三条通でいちばん問題にしたいのは、駐車を先になんとかしてほしいのです。それで景観にしても、看板などもみんな置いておられます。とくに交差点の横からもってくるのが始末が悪いのです。全体的な大きな問題からすると細かすぎると思うのですが、ある程度小さなものもつかまえて、それを広く考えていく。小から大へ広がっていくという考え方もいいのではないかと考えております。

若林委員長 三条通の現状ということでは両側に駐車の車が多くて歩きづらくなっているというのが、いちばん大きな課題ではないかというお話でした。

続きまして四条河原町の南東角にあります、阪急百貨店四条河原町阪急店長の井戸委員にお願いします。

井戸委員 井戸でございます。私どもは百貨店という立場から申しますと、四条河原町界限につきましては京都随一の商業集積地ということで高島屋、大丸、藤井大丸と私ども阪急、そして伊勢丹が出店されました後、近鉄と伊勢丹の二つのパワーで京都駅前というもう一つの大きな集積地ができて、伊勢丹が非常に好調で百貨店のなかでは伊勢丹が一人勝ちという状況がずっと続いております。そのなかでやはり駅前のターミナル性のよさというところで、近鉄沿線、JR 円線のお客様がずいぶん京都駅前のほうで堰き止められていると申しますか、そのように感じております。また観光客の皆さんも帰りにちょっと寄れるという地のよさから、帰りに駅前でというような買い物の傾向が非常に強くなっていると感じております。

では四条河原町界限はどうしていったらいいのかを考えるに当たりまして、今日はこの会議に出るに当たって、久しぶりに御幸町から三条通って新風館のほうまでずっと歩いてみたのです。御幸町から三条通に新しいお店が増えてきたというように感じております。

私の住所は京都なのですが、実は 3 年間梅田のほうにいましたので京都をしばらく離れておりました、京都のまちなかをしばらく歩いていなかったのですが非常に面白いお店が御幸町通、三条通に増えたと感じました。ただ、そこに店出されている方々の話を聞きますと、歩いていらっしゃる方が多いだけで実際に購買されているかというところではないというお話もありました。ただし、お店が集まっていた面白界隈性がある。これは京都駅にはない魅力だと思います。まちの界隈性ということでいえば、和食あり、カフェあり、ギャラリーあり、老舗があり、あるいは新しい店がある。こういうまちは滅多にない、こういう商業集積は本当に珍しいのではないかと思います。そういう魅力を市民の方に、あるいは先ほどいわれたように全国区のまちですので日本全国や世界の方々にどうアピールできるのかが、四条河原町界限に来ていただくポイントかと思えます。

四条繁栄会と河原町グリーン商店街に属しているのですが、商店街は非常にまとまって活動をされているのです。例えばぼつぼつ出てきた個のパワーのようなものがなかなか集まる機会がないのかと思えます。私どもが知らないだけかもしれないのですが、そういうものをパワーとして集めていく、若い人が多いと思うのですが、そういう手段がないのか。まちを歩きながらそういうことを感じました。

それから石野委員さんと居戸委員さんとおっしゃったように、歩いていて道が非常に狭いのと、自転車が通っていたり看板が出ていたり、広がって人が歩いているけれども車の交通量も多い。お客様は集まっているけれども歩みにくいということを感じました。そういうことも改善をする機会ではないかと、一消費者の視点としては感じました。非常に魅力ある都心のパワーを発信するような形を、この委員会のなかで協力させていただきたいと感じておりますのでよろしく申し上げます。

若林委員長 よろしく申し上げます。おっしゃるとおりで、百貨店があってそれぞれに歴史のある商店街があるというのが四条河原町を中心とする繁華街の主力パワーで、こういったところが伝統的な主力パワーなのですが、それだけではなくてまさしく今いわれた御幸町、三条通を中心に新しいお店がいろいろ出てきている。そういうところが一つの新しい魅力を発信しつつある。けれども、そういうところはつながってアピールするようになってきているのかということ、そのあたりはこれからのテーマという面もあるのかなというご指摘だったと思えます。

続きまして京都市女性総合センター、通称「ウイングス京都」が東洞院六角下るにございますけれども、そこを運営されている財団法人京都市女性協会から出てきていただいております事業課課長補佐の奥村委員からご発言をお願いしたいと思います。

奥村委員 ウイングス京都は10年前に開設されまして1日に平均1,300人ほどの利用者がある公共施設です。条例で決められたそれなりの目的があるのですが、普段は商業的な、経営的な感覚がなかなか持てない仕事をしておりますのに、こういう会でどんな発言ができるか不安なのです。それで、今はやはり消費者の立場になると思いますけれども、逆に知らないだけに思い切ったことを言えるかもしれない、ということで発言させていただきたいと思います。

魅力的なまちは日本にもあちこちありますが、私自身は大阪の人間でして例えば堀江であるとか難波であるとか、まちの駅の名前を取ってその周辺へ円く広がっている一帯というものが多と思うのです。京都は、とくにこのまちなかというところは縦に横に、通りを非常に大事にしてきた。そして実際にその通りが個性的な通りとして今もずっとある。すぐ近くにあるのに木屋町と寺町、河原町は少しずつ違って特色のある魅力をもっているということを、ぜひ大事にしていかなければいけないと思います。

職場の近くですので錦通や三条通をよく通りますけれども、その魅力を味わうとしても、それを寸断するたくさんの道路があって、それは運転する車の方もストレスが溜まりますが、歩いて楽しもうと思っている者にとってみてもストレスになってしまってたっぴりと味わうことができないという、とても残念なことになっていると思います。

それについて先ほど自転車とか看板とか細やかなご発言がありまして、どこをまちなかと区切るかは未定であるということでしたが、そこを完全に時間規制で車が入って来られないぐらいの思い切ったことはできないのかと思います。今日もまちなかを歩いてみましたが、宅配業者の方たちが配送中ということで畳半畳ぐらいの台車でいろいろな荷物を届けに走っておられますけれども、トラックが一定のところまでパークして、そこから先を台車に入れていくということをごんごんされているのだと思うのです。実際、四輪とかの車が入ってこないだけで、まちなかがどれほど落ち着いた気持ちのよいものになるかなと思います。

それから四条通や河原町通の道路のことなのです。100円循環バスというのがどういう意味でできたのかはよく知らないのですが、100円という1枚のコインなら財布からすぐ払うことができるということで案外利用もスピード化も進んだのかと思うのです。降車する出口で年配の方がお金を払うところでとまどったり、叱られたり、留まったりして、車が停車している時間が長くなってしまふ。それがあの通りでバスがじっとしていることに拍車をかけているのではないかと思います。これも思い切ってあの通りを走る分は無料であるというぐらいにしたら、都市交通による収入はなくなるけれども、代わりのところで収益が増えるのではないかと思います。乱暴な発言ですけれども、そのようなことを考えていました。

若林委員長 以前に掲載された論文で、車を規制することと歩く人が増えることの間には、かなりはっきりとした相関関係があるという指摘もあるのです。もちろんそれぞれの事情がありますけれども、そういった車のこと。それから100円循環バスもそうですが、

100 円にしたので効果があったのだと思うのですけれども、思い切って無料にしたらというのはたしかにおっしゃるとおりで、このあたりで中途半端に採算を取ろうとすると逆に失敗するというのがこの手の公共性を大事にした施策の特徴でして、そういう費用負担のあり方の問題はたしかにあるのです。抜本的に消費者の利用の流れを変えてしまうためには、そのぐらいのインパクトがあるほうが実は効果的で、別のところでもとを取ったらいという議論はもちろんありうるはずです。個別の独立採算だけが能ではないはずなので、このあたりのご指摘も今後の都心部部会でさらにご検討いただければと思います。

頭出しですので、どんどん聞いていだけになっていきますけれども進めていきたいと思えます。では続きまして、河原町通の三条と四条間の商店街である河原町商店街振興組合理事長の齋田委員からご発言をお願いしたいと思います。

齋田委員 皆さんは商店街という名称を聞かれるといったい何を連想されるのでしょうか。私も今年で63歳ですけれども、34年ほど商店街の理事というものをやっております、今年で理事長になって5年目ですが、かつては商店街というのは横のデパートであるという発想をしてきたわけです。百貨店が商業集積を上にいる積み重ねてきたのに対して、それを横へ並べることによってわれわれは大型店と対抗していこうという発想で私の祖父や父親などは頑張ってきたわけです。

しかしこれは実は早くに破綻していて、いまや河原町通でも新京極通であろうが四条通であろうが、友人がたくさんいますので経営的につらいだろうけれどもなんとしても頑張りたいというお店意の3世あたりが、もちこたえられないのです。できればこれを一棟貸しして、自分は郊外のマンションにでも行って、毎日売上を見て帳尻合わせをすることから解放されたい。これが最近非常に多いのです。ですから昨日まであった店が携帯電話屋になっていたり、NOVAの英会話教室が入っていたり、サラ金が入っていたり、こういうことが日常茶飯事で起こっているのです。これは昨日、今日で始まったことではありません。私が理事長をやる前後ぐらいですから5、6年前から、こういうことが大変顕著になってきました。

他方で、阪急も女性の方が店長になられるなど、時代は変わったなと思っていたのですが、先ほど言われたように3、4年前の京都新聞を見ていただくと私のちょっとした論文が載っております。まちはもう諦めたのです。魅力的なまちの連携でいようということをわれわれが誘導したり、指導したりしようとするのは無理だと。そこに、こういうサービスをされたら残れるということで経営相談に入るとか、そういうことは商店街という組織はなかなかできていませんで、むしろ公共的で大きな、お金も必要な共同でやるようなことを、個店でやると大変だからまちで全員が保証人になって行政の補助金をいただいてやろうということでやってきたわけです。けれどもその段階はとっくに過ぎました。

それで考えたのですが、そのときに京都新聞にモザイク論というものを発表したのです。通りでそろっていなくてもいいではないか。嬉しい宝石や宝捜しで砂浜にいろいろのものが埋まっているように、都心といわれるところに魅力的なものがどんどん盛り込まれて、迷路ではありませんがそれを探し当てるのも楽しいじゃないかと。ただしそれには先ほどからいわれているように交通の問題があります。表通りと裏通りと同じ条件にするわけにいきませんが、そういうことの結集を図るという意味で、表通りの人も裏通りの人も含めて一つのそういう流れをつくるときにどの程度意識的に共同作業ができるのか。そういうこ

との実験が実は 100 円循環バスです。

このことによって、実は交通局だけではなくわれわれもお金を出して、当時西口委員からも大変な配慮をさせていただいて行政もお金を出し、私どもも同じように汗もかいて切符配りをして、販促もして、その代わり自己負担もしてどの程度交通実験ができるか。これによって行政と地域ともっと近づこうと。上から「あなたはする人。僕は指示する人」というスタンスはやめよう。どこかでできる負担はお互いにし合っという過程が、ちょうど今の時期だと思うのです。

こういう話し方をしていますと中川先生に叱られそうですけれども、そういうものを描いて設定してそこへ行くという覚悟を、まちの皆さんに血判状のように名前を書いて拇印を押してくれというところまではなかなかいかないのが現状です。ただ、私は毎日のように産業観光局とはつきあっているつもりなので、今なぜこれを京都市のほうからいってくるのか、今どうしてこれなのかという一抹の疑問は残りますけれども、現状はそういうことで、とくに都心部といわれるところは運命的なものがあります。しかし、片方で西口委員がいわれるように中心地に元気がないと京都市は元気がないというのは、長い間、私が小さい頃からいわれていました。中心地さえ元気があれば、「さえ」というと問題があるでしょうが、少なくとも京都市は元気そうに見えたのです。元気そうに見えるところへなるべく皆さんのお知恵を借りて、何か行き着く波止場が見つければいいなというつもりです。

若林委員長 ぜび、その京都新聞の論文を読ませていただきたいと思います。本当におっしゃるとおりです。団結力があって、一つのまとまりとして商店街振興組合さんがリードをしていたというような実態ではなくなっているなかで、コア商店街としてどう運営してパワーを発揮していくのかが問われるというあたりも見ながら、いろいろな施策への取組を具体化していかないといけない。一方で中川先生のような厳しいご指摘もあるので、それをどうするのか。

齋田委員 先生のスタンスでそういうことをいってはいけません。ただ、各商店街とも今トップの環境はいいのです。その意味では本当にやらないといけないというところにきているということはいえます。

若林委員長 ありがとうございます。一つのチャンスだという見方もあるようなので、そのあたりも追々出していただけたら考えていきたいと思います。

続いては同じく河原町通の商店街になります河原町商店街振興組合の若手理事で、ここ数年、地域のまちづくり活動や青年部の活動などを進められておられます藤野委員にご発言をお願いしたいと思います。

藤野委員 こういう場はあまり慣れておりませんのでドキドキしておりましたが、委員さんのお名前をお聞きしまして、ここ数年来いろいろ活動をさせていただいたなかでお知り合いになれた方ばかりでしたので、ほんと安心して好き勝手をいわせていただければありがたいと思っております。

ここ数年来、いろいろな活動に参加させていただいております。商店連盟のまちづくり研究会というものがございまして、そちらのほうも3年ほど出させていただいておりますし、

歩いて暮らせるまちづくりのほうでも、今日お越しになられている居戸委員さんとも何年にもわたってご一緒させていただいております。それにプラス商店街の振興、今回の商業振興ビジョンに対する思いをどのように形にしていっていいのかわかるとずっと考えさせていただいておりました。先ほどから出ておりましたように都市のステータスや京都ブランドというものが、実際に京都はよその都市と違う、商業もよその都市の商業とは何かが違うのではないかとことをずっとまちづくりのなかで考えておりました。

私なりにここ数年来思っていることなのですが、こういう商店街の理事ということで年齢は44歳なのですがすけれども若手といわれておまして、年齢がいちばん下のほうになります。ということはいかに商店街の高齢化が進んでいるかがわかっていただけるかと思いません。そのなかで実際に理事をさせていただいて商店街の活動に参加させていただいて、そこからまちづくりや、こういう場にも出させていただいています。この時間帯も店のほうは開いておりますので、その間自分自身は商売から抜けていることになるわけです。それイコール自分自身の商売にすればマイナスになるのですが、けれどもなぜ出るかという素朴な疑問も含めて考えたのが、やはり商店街の活動に参加させていただいていちばんプラスになったのは人材なのです。

齋田委員さんや石野委員さんとも最近いろいろ商店街の関係でお話もさせていただいて、今までの商業のあり方もいろいろなお話を聞かせていただいておりますし、商売を通じた京都の生きた歴史をお酒の席や遊びの席でも、いろいろなお話をさせていただいております。それで私は毎日が非常に楽しいのです。商売も楽しいですし、こういうことをさせていただくのが楽しい。非常に元気になります。その元気をまた他の理事さんやいろいろ活動させていただいているなかでお話をさせていただくと、またその方たちも「面白いな」とか「それはいいな」という話がどんどん出ております。それによって商売人の顔がニコニコしてきますとお客さんも、ここの店は面白いとか、店の主人が面白いという話になってきて、少しずつですが輪が広がってくるような形があります。

ですからこの商業振興ビジョンのなかでお願いしたいのは、次世代商業の担い手の人材育成という部分をぜひとも含めていただきたいと思います。いろいろなところでお話をさせていただいて思いますのは、30歳代、20歳代の方であとを継がれると、この不景気の時代ですから自分の商売以外のことをしている余裕がない。そういうことで完全に動かされていない状態です。実際に一緒になって動いてくれるような人は、商売とはこんなに面白いものだったのかとか、他業種の青年会の活動をして他業種のメンバーと話をしていると、自分の商売にこういうヒントがあるとか、よその商売はこうだけれどもうちの商売にすると全然違う切り口が使えるというような、アイデアがたくさん出るような状態がいろいろなところで出ています。

そういう部分で、商業振興ビジョンが策定されて施策として実行されるときに人材育成、もしくは人的情報ネットワークの構築という形でいろいろな話をされる場所がもっとできあがるようにお願いしたいと思います。

若林委員長 やはりどういう集まりがどのように用意されるというのはまだ課題はありそうですけれども、そういう集まりに出られて芽が広がっていく、元気になっていくといえますか。たしかに商業を議論する際にいろいろなことが課題に挙がると思います。やはりそこにおける実際の商業者というのか、商人(あきんど)というのがあるのか、どんな

言葉を当てはめるのがいいのかもありますが、実際に担ってチャレンジしているのは事業者の一人ひとり、人間です。とくに次世代、若い人に視点を当てた取組をとというお話だったと思います。

続きまして新風館，2001年1月からですから今年で3年目ですが、もっと前からあったような気がしていたのですけれども、情報発信型の商業施設として KBS テレビの番組収録やいろいろ行われています。その新風館館長の渡辺委員さんにご意見をお願いしたいと思えます。

渡辺委員 まず京都というものは世界各国の方がそこに住みたい、働きたい、仕事をしたいと思われている都市だと思うのです。ということは、その地域に思いがある私たちがその思いを果たせるためにいかにそれをしていくのが、やはり京都で働く、住む人たちの使命なのではないかと思えます。

例えばそこに住む場合はそこに住みたい、一生暮らしたいという思いがおそらくあるでしょう。働く場所であれば一生働きたい、そこで働くと元気が出るとか。あるいはそこに行きたい、そこに思い出をつくりたい。そういうものが今皆さんが話されている魅力の部分だと思えます。そういうキーワードを一つひとつ整理していく。例えばそこに行きたい。アクセスはどうか、そこに行くために守らないといけないルールは何か。そういういろいろなそのまちを大切に思う人たちが中心となってそのまちのポテンシャルを高めていながら、そのまちを継続するためにどう考えていくのかはそれぞれ今住んでいる人、働いている人、訪れる人たちの目的のなかにたぶんあるのではないかと思えます。それを示してあげないとなかなか伝わらないのではないかと思えます。

例えば単純な話、そこに行きたいということであれば、きれいなまちがいい、当然楽しいまちでないに行きたくない、行きやすいほうがいい。そういう部分から今はできていない部分を整理していくと、都心部という考え方なのか、京都全体という考え方なのかどうかは別として、まず私たちのテーマとして都心のなかでそのような考え方を整理していくべきなのではないか。そしてその地域のポテンシャルを上げる。どこにでもあるまちでないのが京都だと思えます。そういう地域の方々、働いている人が訪れる人たちと一緒にできることが、やはり世界に向けて発信する京都なのではないかと思えます。

私も新風館のなかの利益からいかにまちに還元していくかとか、先ほど観光の方が多いといわれたのですけれども、私は地域の方に来ていただく商業施設をつくりたいと思っています。地域の方が毎日来て、それで観光の人たち、いろいろな人たちに伝えていってくれる。そういう一人ひとりが伝えていけるまち、自慢できるまちということが京都に住んでいて、働いていて自慢できるもの、日本に向けて、世界に向けて発信できるものだと思います。そういう観点を何か提案できればと思っています。商業で働いてつくって、それを個人でしながらいろいろな業者に還元していただいているのです。

まちができる最初の機能というのは、そこに井戸ができて、そこに住む人ができて、そこにまちの機能ができるように商業が生まれ、その商業に住む人たちのためにつくって、住む人たちがまた補っていく。そこで利益を得た人たちがまちにどう還元していくか。そういう流れでまちができてきて、それが大きくなって都市になったと思えます。そういう考え方のなかで、やはりまちが一つになっていくためには、何かそういう利益のなかからまちに対して一人ひとりができるようなことをしていくことです。住む人、働く人、訪れ

る人と共に文化・教育を創造し、伝えることができるそのようなまちづくりが本当にできたとすれば、私もいろいろな国を見ましたけれども他のどこの国もできていないと思うので、そのようなことをそこに住む人、働く人、訪れる人たちが一緒になって一つのテーマで伝えられたらと思っています。

具体的な話がないのですけれども、そういう話をする中で抜けているのは、媒体も含めてそれをいかに発信していくかだと思います。そのようなことをしていることを、そこに住んでいる人たちはもちろんのこと、いかに外の人たちに伝えていくのがポイントです。それに京都を支援してくれる媒体や京都に根づいている企業といったところから発信していただく。一人一人が役割を認識していくことで京都自身を大きくしていくことになるのではないかと思います。

京都の発見ということでいろいろな雑誌に取りあげられて、京都以外の県の方たちがみんなそれを買って京都に来られる。京都はそれだけの魅力をもっと自分たちで発信していけばもっと多くの利益が生まれ、多くの人が楽しんで京都の文化を感じてもらったり、初めて見る発見をしてもらえたりするわけです。そういう人たちの文化をつくるために京都にいろいろな人たちが集まってきていただけたらと思います。そのようなことをテーマにしてつくっていききたいと思います。

若林委員長 実は以前、新風館にお邪魔させていただいて渡辺館長のお話をうかがったときに、若い人向けの商業施設をつくっている人のお店中心のお話をうかがえるのかと思っていたら、今のお話のように使命感といいますか、京都で商業をやっていくうえでの使命のようなものをお話されて、逆に意外で感動いたしました。それから媒体という点ではお店も媒体ですし、通りも媒体です。したがって媒体としてさらにどう強めていくかもあるのですけれども、同時に何をアピールしていくのかということもあるのでしょうか。アピールしていく中身も問われているのだらうと思います。

渡辺委員 おそらくそれはわれわれがお互いのことを知らないといけないと思います。私たちが子どもの頃の商店街というのは、お互いのことを紹介しあったはずなのです。そういうところで買いなさいと両親から教えられてそこへ買いに行った。そういう自分たちにプラスになる、生活に入ってくるものが私には非常に魅力でした。今でもそういう魅力のあるお店はたくさんあります。それは私たちが個々人で発信して、伝えていくことができると思います。

若林委員長 その意味では京都外から来られる人ももちろん大きなテーマですが、京都市民にまずよく理解されてよく利用されないというところがきちんと伝わりません。そういうテーマという意味では、京都に住んでいる方にとってどう認知され、どう愛されて、支えられているかも大きな課題なのでしょう。

あいうえお順で行くと飛ばしておりますして申し訳ございません。前後してしまいましたけれども2003年3月から三条御幸町の角の1928ビルで、NPOが初めてFM局の認可を受けて始められた京都三条ラジオカフェというものがございます。その放送局長で自ら番組制作等も手がけられておられる松岡委員からご発言をお願いいたします。

松岡委員 今ご紹介にありましたようにこの春、3月31日に誕生したばかりのコミュニティFM ラジオ局です。先ほど阪急百貨店の井戸委員さんが三条御幸町界隈は最近にぎやかだといわれましたが、日々それを実感しながら仕事をしております。番組のなかでウォーキングカフェという土曜日の100分番組がありまして、これは通りを一つひとつ歩いていこうという番組です。10メートル歩くのに100分かかるといほど、京都は本当に魅力いっぱいのみちだなというのが番組を通じた実感です。ただ、その通りを歩いておられるいろいろな問題があります。魅力イコール活性化というものではないのだな、いろいろな問題を抱えて苦しんでおられるところもあるなということも実感です。

都心部、繁華街をどうしようかという点については、京都市の方が来られて雑談をしておりまして「あなたは何を求めますか」と聞かれたときに、一般的ですが京都らしさというものを求める。繁華街にはそれが少し欠けるのではないかというご意見を申しあげました。一步入れば路地があって、そこに京都らしさがあるといわれましたけれども、繁華街は全国どこを歩いてもみんな一緒だなという気がします。それはやはり日本の法律づくりが、それから各都市の都市計画づくりが悪かった。遠くを見ない都市づくりだったと思います。近くから大きくということもありましたけれども、やはり繁華街を見ても京都を感じさせるようなまちづくりが暮らしやすさにもつながるのではないかと感じます。繁華街にもそういうものを求めるといこと。

それから先日、京都伝統工芸産業支援センターの理事長にお話をうかがうことがあったのです。その方がおっしゃっていたのは、もともとそういうものに慣れていなかったということもあるのですが、情報発信に欠けているということと、それから伝統産業のなかに横のつながりがぜんぜんなかったというお話をうかがいまして、それは商店街にも同じことがいえるのではないかと感じました。他にも言いたいことはございますが、今回はこれぐらいです。

若林委員長 情報発信がないという場合に、一方でFM局をされているので、FM局としてはどういうビジョンをおもちなのかということもまた機会があれば追々お聞きしたいと思います。コミュニティFMですから、まちがどう発展していくかということと共に発展していくFM局かと思えます。始まったばかりですからおそらくいろいろ大変だろうと思えますが、若い人たちもたくさん参加されているようですので、またそのあたりもお話をいただきたいと思えます。

あとは市民公募委員のお二人からうかがって一通りという形になります。まず、市民公募委員の一人目は、1級建築士、技術士で地域のまちづくりの取組に携わってこられた大島委員からご発言をお願いします。

大島委員 今回市民公募委員ということで参加させていただくのですが、私は決して都心部にお店を構えているわけでもなく、都心部に関係するような生業をしているわけではありません。今回この都心部部会に参加させていただく私のスタンスとしては、お金は大して落とせない「しがない消費者」として、どのような都心部なら歩いて楽しいか、買い物をして楽しいか、知人に自慢できるかというような視点をもって参加させていただきたいと思っております。

この4月まで、ここの地下1階に入っている、京都市景観・まちづくりセンターのほう

に所属しておりまして、京都のまちづくりについていろいろ学ばせていただきました。まちづくりの世界で申しますと、住んでいる方が安心して住み続けていくためには自分たちの地域の資源を知って、それをまず発信していく、そして新しい人が来た場合には地域の文脈に沿うような形で家を建ててもらったり、暮らしていただいたりということが大事だ、というミッションをもって仕事をしていました。おそらく商業振興についてもまったく同じことなのだと思います。

具体的に申しますと、最近町家再生店舗が雑誌やテレビなどでよく取りあげられていますが、結構賛否両論で評価もそれぞれだと思います。実際に私も嫌な体験をしたことがあります。町家再生店舗で少し値は張るけれども、いいものを食べてゆっくりしようかと思って入っても居酒屋と変わらないような対応をされてしまいます。私は3年間ほど仲居をした経験があるのでそういうマナーはうるさいのですが、料理を出すのもテーブルに手をつけてパンと出したり、お客の前でお皿を重ねてしまったり、まったく雰囲気そぐわないサービスを提供しているところに入ってしまうと、「二度と行くか」と感じてしまいます。

今回、都心部部会に期待したいことは、非常にすごいメンバーが揃っていると思いますので京都らしさというものをぜひ抽出していただきたいのです。マニュアル化することは決していいこととは思いませんが、先ほど使命という単語が出ていましたけれども、そういう京都の都心部でお商売をしていくうえでの使命、あるいは京都らしさ、京都ブランドというものを明文化していけばいいのではないかと感じました。

若林委員長 サービス一つとっても「京都」というものが必要なのではないかとというご指摘で、たしかにそういう世界を大事にすることも大切なテーマだと思います。

もう一人の市民公募委員ですが、立命館大学大学院の学生さんで商業・流通の研究をしておられる乗原委員にお願いしたいと思います。

乗原委員 私自身、京都に住んで今年で5年目になるのですが、やはり京都に住んでよかったなと心から思うことが毎日のようにあります。やはり京都に住んでみて初めてわかるよさと、観光客として来たときのよさというのは違うと思うのです。どちらがいいかというのはわからないのですが、住んでみてわかるよさというのは観光客の人には伝わっていないと思います。住んでみてわかるよさを少しでも、ほんの1%でも観光客の人にわかってもらえればリピーターといいますか、また来てくださるのではないかと思います。

産業観光都市のようにいわれていますけれども、そういう意味でそのいいところをもっと伸ばすために観光客の人にまた来てもらう。なぜみんながハワイに何回も行くのか。そういうところを突き詰めていければ、リピーターとして京都にまた舞い戻ってきてくれるのではないかと考えています。

都心部部会で思っていることは京都は真似をするということではなく、京都独自のオンリーワンのものをつくってほしいと思っています。そのなかで私は京都というのは一種の東京ディスニランドに似ていると思っています。まちを歩けばお寺があり、食べ物はおいしいし、京都にしかないものがある。そういうところを見ていくとディズニランドと一緒なのです。ディズニランドと京都のまちは何が違うかということ、ディズニランドは皆さんよくご存じだと思いますけれども夢があるのです。老人でも大人でも子ども

でもリピーター率が 97%以上ということを見ても、サービスもあるのでしょうけれども、そういうところが大きなところだと思っています。

ですからその夢の部分で、それを夢だけではなくて実現可能性のあるビジョンを期待しています。

若林委員長 オンリーワンとディズニーランドということで、ディズニーランドと比較をするとディズニーランドには人が住んでいるのかとかいろいろあるわけですが、ディズニーランドに住むということもありうるのかもしれませんが。このなかでいちばん若い委員ということになりますので、いろいろ調べてまた発言を期待したいと思います。

皆さんのご協力もありまして多少遅れ気味ですが何とかうまく進んでおります。もう少し時間がありましたら 2 周目とって思っていたが、ちょうどいい時間でもありますので今日は頭出しということで、一通りのご意見をうかがったということにさせていただきたいと思えます。これまでのご意見に対する感想を含めまして、最後に産業観光局商工部長の山添委員からご発言をお願いしたいと思います。

山添委員 皆様には非常に多岐にわたるご意見を頂戴しましてありがとうございました。実は私は前回平成 10 年度につくりましたビジョンのときには、隣の西川課長と同じ立場で事務局をしておりました。当時は大店法がいよいよ立地法に変わるという商業環境が変わるなかでの議論で、商店街を中心とした商業集積の果たす社会的役割とか、そういう根本的な部分でずいぶん議論になったことを覚えております。そういうことで、例えば今日ありましたような都心部をどうするかとか、そういう個別の議論までには正直に申しあげてなかなかいかなかったということが課題の一つだったと思っています。そういうなかで中川先生からいろいろご意見をいただきましたが、アクションプランと掲げている大目標の間があまりにも落差があって、それがどうなのかという部分はたしかに課題として残っていると思えます。

都心部だけで考えると、今空き店舗があり、それがどういう業態に変わるかは別として空き店舗のまま残るようなことは今のところないと思っております。その意味ではわれわれが考えている都心部は他の商業集積が非常に苦戦をしているなかで、まだ実力もあるし、機能を果たしているわけです。それがこれからずっと続くのかというと、そう安穩なものではないだろうと。今回、商業振興ビジョンの一つの柱として都心部をとらえているのはそういう認識もあろうかと思っております。

そのなかで例えば商店街のような単位で考えていかなければいけないことは、閉店が早くて夜間の観光客などに対応できないとか、先ほどのようなサービスの問題もございまして、それから商業集積での特色等を出していくためにどういうことがあるのかも一つあると思えます。一方で交通問題や環境問題の面で見ると、何々商店街という区域はあまり関係ないと思えます。そういう部分は齋田委員さんもいわれていましたが、非常に広域的な意思の形成をどうやっていくか。非常に難しいけれども考えていかなければいけない課題だと思えます。それは単に商業集積、商業者の方だけではなく西川課長の説明にもありましたようにいろいろな運動が台頭してきているなかで、そういう組織とどう一緒にやっていき、またそのなかで意思決定をどう共にしていくのか。そういう部分は非常に大きな問題ですが、そういう点についても議論が深まって少しでもこのビジョンに生かせるらしい

のではないかと考えています。

またいろいろご意見を出していただきますけれども、今日はどうもありがとうございました。

若林委員長 次回から都心部の活性化に向けて、さらに議論を、意見交換を進めていきたいと思います。そのためのテーマ、切り口に関しては今後事務局とも相談させていただいて調整をしたいと思います。今日のお話をうかがって、大きく分ければ三つですが、細かく分けると六つほどテーマが出されていたととりあえずの整理をさせていただいて、次回以降、テーマの一つのたたき台にさせていただきたいと思います。

最初の大きな括りは、やはり京都ならではの使命感といいますか、最高水準を目指すとかオンリーワンとかいろいろなキーワードが出ておりました。そうした日本全国、世界にアピールするような使命をもった京都の都心部商業というテーマだと思います。ただ、これは裏テーマもありまして、そのためにも京都市民自身の生活をもっと支え、潤いを与え、そして京都市民自身の暮らしが周りから見ると本当にうらやましがられるようになれば、当然それも大きな発信力になるわけです。京都市民を支え、京都市民に愛される都心部商業ということが裏テーマとしてはあるのだろうということで、大きく分けると一つですけども、細かくすると二つあるというのが一つ目です。

二つ目は安心して歩け、楽しめるまちである都心部商業ということです。これは細かく分けると、一つは車の規制や駐車場、自転車のマナーを合わせた交通問題と、もう一つは石野委員が提言されていた安全や治安という問題です。安心して歩け、楽しめる町並の都心部商業という大きな括りになります。細かく分けると交通と安全という二つの別のテーマがあると思っています。

最後は、なんといってもそのためには商業者がどう活躍するのが大きなテーマになると思います。そのための一つにはやはり情報発信をどう強めていくのか。商業者同士が互いに知り合うことも大事ではないかという議論もありました。ローカルのコミュニティーFMの役割なども出てくるでしょう。こういった情報発信ということ。もう一つはそれを担う人材が元気に活躍することが必要です。そのためにも人材育成なり支援、交流という、商業者の学びあいや一緒にネットワークをつくってやっていくということ、既存の商店街をベースにしながらさらに広げて、商業者が横につながっていくということが大きな課題として指摘されたと思います。情報発信と商業者の交流といったことも切り口になるテーマだと思います。

細かく分けると六つですが、大きく分けると今日はこの三つについて皆さんのご意見があって学んだように思います。これを次回、次々回の2回、都心部部会のテーマに整理し直しまして、私及び事務局のほうからご提案させていただきます。それを踏まえて、それを中心にさらに今日の議論を発展させたいと思っておりますので、今度ともよろしく願いいたします。

また以前に何度かお会いした方もいらっしゃるわけですが、この都心部部会そのものは会が限られていることもございます。私のほうも事務局共々、個別にご意見をうかがいにまいります。今日、本当はそれぞれの商店街や関係しているお仕事の現状をお聞きすべきところでしたが、時間がないために都心部部会の提言だけのことになっています。それぞれのお仕事の現状から行政へのご不満も含めて、いろいろ回ってお聞きすべきだと

思っております。これは日程調整させていただいて9月、10月とご訪問させていただきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

6 閉会

若林委員長 それではこれで第1回の都心部部会を終了いたします。最後に事務局から何か事務連絡はあるでしょうか。

事務局（西川） 委員の先生方、どうもお疲れ様でございました。次回、第2回都心部部会は10月1日（水）午後1時～3時に、学校法人池坊学園の会議室で予定しております。どうぞよろしくお願いいたします。以上でございます。

若林委員長 それではお忙しいなかを、夜遅くまでご意見をいただきまして誠にありがとうございました。これで第1回都心部部会を終わります。どうもありがとうございました。